

千日刈峰行・施設の維持管理・修行者接待が山彦ぐるーぶの本職の三本柱ではあるが、それとは別に毎年恒例の遠征登山というのがある。

今年は八月二十六日から四日間にあつて開催された一連の旅。歴史の一端を護る大峰からガラリと舞台を移して、「山を愉しみたい！」という純粋な想いで描いた今回のチョイスは、少々広域にわたるが東北の名峰、百名山にも数えられる鳥海山、岩木山、八甲田山の三山である。昨年は途轍もない暴風雨に見舞われて撤退を余儀なくされたあの山を執拗にリベンジする格好となった。結果は正解だった。今回はそのリポートを順を追って筆者（上村）がお伝えしたい。

二十六日(日)

初日はそれぞれ車に分乗して新宮を六時、一路伊丹空港に向け高速道路へ。各地から出発で総勢四台仕立の移動である。今日まで指折り数えつつ半日も経たずに目まぐるしく変わる天気予報に一喜一憂していたが、いざ路上に出れば大きな障害はないように思えてくる。

大泊で上に乗れば後は伊丹まで信号の無い一本道だ。途中、新名神の混雑には気を揉まされたが、幸い規制も渋滞もなく定刻よりも早い。

この道路網の充実には隔世の感がある。さっきまで鬱蒼たる深山幽谷を無数の隧道で擦り抜けたと思えば右に左にランプを下り、一昔前は渋滞のメッカだった豊中に入る。程なく長大なフェンス越しにすらりと伸びたジェット機の翼が目に見えび込んできた。乗員を降ろせば車を預け、ターミナルロビーに向かう。

受験勉強と運転は座つても腹が減る。チェックインを済ませ搭乗までの開いた時間、早速筆者は美々卯でざる蕎麦にした。スケージュール上、非常食に手を付けざるを得なかった去年とは違い、各メンバーもそれぞれ思い思いに腹持えを済ます充分な余裕があった。

ボーディングブリッジからちらりと見える機影はエンブラエル百九十型。一昨年ブラジル生まれの新鋭機は革張りシートのゆったり仕様で、小柄な割に大きなエンジンと広い翼面積を持つ百人乗り。生気にも十キロ上空を時速七百公里で飛ぶ。翻って我が三菱ジェット。お客さんに愛想尽かされる前にいい加減早く納品しろよと思う向きも多いと思う。

十一時五十分の定刻通り、一旦離陸した機は左巻きで緻密に複層する長螺旋を描く伊丹伝統の空路に従い、スルスルと高度を稼いでいく。ターボファン式の全く静かな飛行機だった。眼下にはもう次の機が全速で浮き上がってくる。そのまた次の機が滑走路に出る。びつり建て込んだ市街地でこんな事が何十年も繰り返されていく。見下ろすと万博公園を下った辺りに筆者実家の古びた屋根が見えた。左奥には箕面自然遊歩道、能勢の妙見山、横尾山、行者山、右奥には高槻の阿武、竜王、ポンポン山、京都天王山、愛宕山は雲の下、県境の金剛生駒そして、と楽しい山々が一度に俯瞰できる。飛行情報を告げる機内アナウンスが終わる頃にはもう北アルプスの上空に差し掛かる。覗くと雲の隙間に黒四ダムの堰堤と茶色いフチで囲まれ、豪雨に備えてか放水後の水面がくつきりと見える。右下に目をやると緑の斜面に幾条もの茶色い谷すじ、雲の合間に白い雪渓がある。蓮華岳、針ノ木雪渓の辺りか筆者には同定できなかつたが、望外のシアワセな光景であったことは間違いない。

伊丹から一時間半。山形に降りるとそば降る雨模様。ここからは貸切バスが我々の脚となる。最初に訪れたのは酒田市の米蔵施設、Zエスドラマおしんの口ケ地でも有名な、明治二十六年築の山居（さんきよ）倉庫。樹齢百五十年のケヤキ三十六本の並木に守られた、黒に白い切妻を整然と連ねる土蔵十二棟からなる十八万俵一万八百

トン収容の巨大な施設で二重屋根工、驚くことに今も空調設備で近代化され実際に倉庫として使用されている。ここには建屋の一部を割いて、庄内米歴史資料館が併設され、当時の業務風景や農家の室内を模したジオラマや実際に肩に担いで俵の重量を体験できる装置、ちよつとした土産品ブースや食堂もある。建屋に入るとスツと外界と隔絶され、クラシカルな外観とは裏腹に温度湿度が安定しているのを肌で感じる。

施設の裏は最上川に出る船着場になっており、磨り減った石畳のスロープが水面に繋がる。ここを女性もがベルトコンベアとなって肩で担いで出荷していたとは恐れ入るしかない。米俵一俵六十キロ、男性に換算すればざつと八十キロ超の負荷になる。

筆者は元スキー部員で、おんぶで神社の階段上下というのがあり、毎日やっても一発で脚がガクガク振え、笑い合った事を思い出した。こんな筆者が当時このバイトに就いたとしたら「টেমেই使用えねえ野郎だなあ!」と手厳しく扱き下ろされたことだろう。

資料館のパンフを見ると、

「一六二二年に入部した酒井忠勝公は「庄内は天恵の沃野、正に之を以て國を建つべき楽土なり」と述べた」とある。もしお手許に残っていればご覧頂きたい。

山が綺麗だと水が美味しい。水が美味しいとコメが美味しい。コメが美味しいと酒が美味しいと言うのが正にその通りである。米自体は南方系にルーツを持つ穀物だが、品種改良が進み今では寒冷地まで広く栽培される。北の産地ほど平均気温が低く害虫や雑草の発生数も活動期間も少ないので散布する農薬も少なくて済む。なので西日本産の低農薬米よりも東北以北産の普通栽培米の方が農薬使用量が少なかったりする。言われてみれば山を歩いても虫の数でそれは実感する。こう言った意味でも米が美味しい土地柄なわけだ。

当時の日本はその衣食住全てを当然のように国内で賅っていた。今は産業廃棄物でしかない収穫後の稲わら自体が当時ではマルチな産業資材であり、商品にうってつけの保護収納運搬容器となる。更に

敷物にも履物にも建材にも肥料にも燃料にもなる。今では高度社会ゆえに出荷用の容器一つ取っても新調し、送料が掛かり、全ての単価が高い。

里では荒れた放置山林田畑が増える一方で、世界トップレベルの生産技術を持ちながら安易に輸入と増税で燃料から日用品まで賄う日本は、典型的な器用貧乏に陥った。ひとたびインフラが止まれば風呂どころか湯茶の一杯も満足に沸かせなくなる現代を思えば昔の人は逞しかった、という前にハイテク上に胡座をかいた我々の方が生き物として華奢すぎるのかもしれない。そんなことを教示してくれる施設だった。

翌朝からの食料調達にはこの倉庫に近接の地元スーパーに買い出しにも行く。遠く酒田くんだりでもさか南高梅おにぎりを買うとは夢にも思わなかったのではないだろうか。思惑の五平餅だお焼きだきりたんぽだは幻想に終わった。上げ膳据え膳の一般ツアーとは違い常に自分の身は自分で守るのが山彦のセオリーであることは忘れてはならない。

最初の宿は去年のにかほ象潟さんねむ温泉の南、遊佐鳥海温泉悠楽里。階上レストランの大窓一杯に臨める日本海の夕日シーンは、ただそれだけでリッチだった。中部以北の人にはミカンとイルカが珍しく映るそうだが、我々にとっては雪と夕日が珍しい。酒豪揃いの山彦リカー組は移動の疲れかいつもより紅くなるのが早い。明日の長丁場に備えて早々に部屋に戻る。

二十七日(月)

一夜明けてくだんの鳥海山、五時出発のため宿の厨房が間に合わず、昨日仕入れた朝飯を淋しく掻き込んで装備の点検となる。荒れないことを願いつつバスで鉾立登山口に運ばれると去年とは違い曇天だが景色は明るく山容が目視できる。行けそうな気もするがどの天気サイトを見ても予報はバラバラで確証を得ることはできない。特に

今年の気象は専門家も首を傾げるほど前例のない乱れ様で、過去の経験値が全く通用しない。



コースは鉾立(二一六十メートル)〜山頂(二二三六メートル)の八キロ区間で約千二百メートルの落差を往復する。前鬼ゲートから釈迦ガ岳まで七キロ歩いて千二百登る、と言えば大体の全容が掴めるだろうか。しかし鳥海新山山頂には後述するが釈迦にはないトンデモないオマケが付く。

御浜(おはま)小屋までは整備された石段が続く。気候が良いので同じペースでも格段に快適で、ちよっと休めばスツと汗が引く。千三百メートルから上は高木は灌木に代わり風通しがよく広大な視界。

樹木が伸び放題の大峰山脈ではこうはいかない。ここが中部以北の夏山の魅力の一つだと思つ。小屋で一服する間、その先を見るとガストてはいるが時折下界と海面がちらりと見える。目前には鳥海湖、あの身の危険を感じるほどの風圧を感じたのは去年この小屋前、この乗っ越し手前である。

火山湖があったのか。しっとり湿った土の路面はむしろ歩きやすい。一日ズレていればこうはいかなかっただろう。この植物像に関して去年度の濱野氏が詳述なので割愛するが、足もとには夏の花々が時おり咲き残り、プチプチ甘酢っぱい木イチゴも真っ赤に熟している。八丁坂、御田ヶ原、七五三掛(しめかけ)、ちよっとした雪渓、千蛇谷、そして鳥海山大物忌神社、長いが退屈させないコースだ。

神社横で昼食にする。キツイ紫外線のせいかわ涼しいのに皮膚がジリジリそば痒い。ふと眼の前には神社から見て高さ六十メートルほどの峨々たる岩鋒が王冠のように大小三〜四本そり立つのが見える。それが鳥海山新山山頂である。

多角形の大小の岩がガツガツと咬み合って、最大斜度七十五度ほど、規模こそは小さいものの槍ヶ岳穂先とジャンダルムを足して二で割ったような風貌だ。ここを登る。両手を岩に掛け、利き足でひよいと一段登る。軸足をその上の岩に掛ける。乗れば次の岩に手を伸ばす。揺すって浮き石でないことを確かめる。また次の一段を探す、の繰り返し。そのうち伸ばす腕の脇の下からさつききの神社が見える。小ピークを超えればそそり立つ狭間の暗い切れ戸をガクンと降りてはまた登り返すと、いつの間にか狭い頂上に出る。

岩の上にはペンキで手書きの表示があった。他の登山者と融通し合つて撮影する。山頂は前述のように複数の突起からなり、その中で一番高い所を山頂とするため十人で手を繋げば困るほど狭い。下りもまた難儀で、足を降ろす場所を一つ探す。カニの縦這い横這いなら足の置き場の目印があるが、ここには何も無い。ガイド付きツアーなら先にザイルを張って然るべきレベルの岩峰である。カニ

ならぬ。トリの縦這い^いでも呼ぶ方が良いのではないだろうか。ザイル経験豊富な重鎮、樋口氏に難易度を伺うと、「槍、劔よりも難しいね。だってあつちは足場も鎖も至れり尽くせりだもの。」筆者も全面的に賛成である。

頂上からすぐ下にも岩が折り重なってできたトンネルがある。腰を屈めて三メートルほどの暗がり中程ほどにはお札と供物が置かれてあつた。ここは胎内くぐり^いと言われている。それを抜けると再び登ってきた道に収束する。

下りは少し道を変え外輪山コースを取る。行者岳、伏拝岳を通り越して七五三掛辺りで往路に戻る。

右手は火山活動で吹き飛ばされてザックリと切れ落ちた崖が一キロほど続く。そこを往路に使用した訳だ。覗くと来た道を帰る登山者が小さく見える。左手はなだらかな斜面の山腹と、その向こうに広がる平野部と海の遠景を眺めながら小ピークを上下しつつ徐々に高度を下げていく。振り返ると山頂は次第に遠ざかり、トンデモないオマケは再び山腹の陰に遮られて緑の斜面の上に小さくそびえ立つようになる。

御浜小屋に戻り、景色を眺めながらしばらく休憩を取る。ここからは駐車場までの石置一本を残すだけである。もう四度目の通行ともなれば目が慣れてきた。

最後まで風雨に遭うこともなく、一人の事故、故障、脱落者もなく、このコースを制覇できたことは称賛に値するだろう。気が付けばアルプス縦走並の十二時間もの長丁場であつた。コースタイムを見ても山岳図記載値に劣らずその実力は四十代健脚とみて差し支えないだろう。改めてメンバー各位の体幹バランスと長尺のスタミナに驚く。

すっかり遅くなつてしまった。バスに戻り、この日の宿、グラントパークホテル大館へ移動する。鳥海山から大館までは直線距離で百二十キロほどある。これは新宮―大阪間と同等の距離になる。バスは

高速区間で渾身の回復運転措置のお陰で予想よりも二十分以上早着の八時四十五分着になる。

その車中、大間マグロやホッキ貝も幻想か、と現地の外食関連を調べると殆どが閉店。ヒットするのは料理の真贋が判然としない居酒屋が数件とコンビニしかない。さんざ迷った末、時短と物資補給を勘案し、昨日は惜念の南高梅おにぎりに引き続き、夜も更ける今夜はローソンのおでんだ。

二十八日(火)

三日目は岩木山を登る。この日は八時出発なのでゆっくりと朝食を摂れる。登山口へは岩木スカイラインで駆け上がり殆どの標高をこなしてしまふ。

山は一六二五メートルあるが道路終点の一二五メートルからリフトで更に千五百メートルまで上がるので登山というよりは観光色の方が濃い。徒歩で登山道も選べたが、景色観たさにリフトを選ぶ。昨日の長丁場で疲れた脚を癒すには持つてこいの一日である。しかしそこから上は、三山中で最も短いコースではあるが頂上までの三百メートルが中々のクセ者で、急峻で揃り鉢状に砂と浮石が多く、よく見ておかねば落石をかつ食らう。特に下りでは気を抜くとたちまち横滑りを誘うトリッキーな区間である。短いが立山雄山一ノ越を彷彿とさせるラフな道であつた。

下りのリフトが楽しみだ。どこのリフトもそうであるが足下からダイレクトに広がる壮大な景色が素晴らしい。鳥海山同様独立峰の岩木山も、ぐるりと見渡す景色は負けず劣らずゴキゲンでいつまで観ても飽きなかった。

バスに戻ると天然水が配られる。ちやうど水切れで大変ありがたかつた。メンバー全員が元気に揃うと街へと下る。六十九ターンを擁するスカイラインをスルスルと下り、生え揃った広大なモロコシ畑

の中を抜ける途中、嶽きみ(だけきみ)なるトウモロコシの路上販売テントに立ち寄り、自宅送りにする。その公式サイトを観ると、弘前市の西部にある岩木山の嶽地区(標高四〇五メートル)の農場、嶽高原で栽培・収穫されたトウモロコシのことを総称して言います。とのこと。

「きみ」とは「キビ」つまりトウモロコシの方言で「嶽モロコシ」という意味だ。「厚意でサンプルが配られ塩茹でのアツアツを頂くと、長くて甘くて柔らかくて先っちょまでツヤツヤの真ッ黄色。ビッシリ粒揃いに充実しており、短く表現すれば「歯に詰まらないモロコシ」と言えば「理解頂けるだろうか。今まで道産ものを信じて疑わなかったがこれは別格ではないか。通販もあるので後日また頼みたいと思う。」

その後、岩木神社に参拝、御朱印を頂いた。門前ではリンゴのシャベッコーンの路上販売が立ち、メンバーの目に留まることになる。それまでゆつたりとしていた雰囲気は一変、周囲の観光客まで釣られて皆あちこちでペロペロしだすという、思わぬ山彦効果が生じて微笑ましかった。これが爽やかな甘酸っぱさでサラツとしたあと味。もう一度味わってみたいと今でも思う。売り子さんの深い一礼と逆立ち狍犬の彫刻が印象的な社殿であった。

更に「ねぶた村」に立ち寄り、土産物を買ったり津軽三味線の実演を聴いたりできる。施設内にはねぶたの絵付けや職人による木彫工房や太鼓演奏などをさせてくれるワークショップも併設されている。ねぶたは一般名詞、「ここの興行はねぶたと言うのだそうだ。その駐車場に豪華な日野セレガが入ってきた。革張りの最新型で乗り付けたのは中国人御一行様である。ここにもインバウンドの流れがきている。自力発信の出来なくなつたこれからの日本は「外付き合い」も上手に受け入れて行かねばならない。沢山お買い上げのご様子なので、数十人様の何かとデカく在わすはまあ良しとしておこう。」

この日の宿は弘前駅前すぐの「アートホテル弘前シティ」で今回の最終日前夜となる。東北最後の夕食は「プランナー」の粋な計らいで民謡居酒屋で地元料理と津軽三味線の音色を堪能させて頂く。

料理は川島、梶野両氏が詳述されているので「参照願いたい。荷物を部屋に上げたら翌朝食を買い出しに出る。案内にあったコンビニで品定めする窓の向こうに大館駅ターミナルが見える。うーむ、これは何か匂う。妻の袖を摘まむと二つ返事が帰ってくる。直ぐにそのビルに向かうと、「弘前アプリーズ」あおもり旬菜館とある。ケーキや饅頭まで焼いている大きな物産店売場がやっぱりあった。床面積も種類もねぶた村の数倍、価格も物によっては一割は安いではないか。こいつは迂闊だったなと心で地団駄を踏みつづ目新しい物を見つけては買い足す。パスタもイートインできる立派なベーカリーで「当地パンを見つめる。明日の朝食はこれだ。終盤第四コーナー手前とんだダークホースに出くわした。」

さて、夕食はタクシーで会場へ向かう。この時刻のドライブバーは七割方中年女性、残りが初老の男性という構成は非常に興味深い。タクシー乗務員とはまた激務を、とお伺いすると、「三重県に出稼ぎで建機オペレーターとして舗装工事に従事したとのこと。いきなりすごい方だ。「当地では未だに「運ちゃん」と卑しむ文化が残り、同じ女性からもぞんざいな扱いを受けることがあるという。女性ゆえの細々とした家事もあるのに、辛抱強く男性顔負けの働き者だ。」

質素な造りだが小舞台のある小ぢんまりした店は奏者渋谷和生氏がオーナーである。津軽あいや節から採った屋号「あいやだ」。ねぶた村でも聴いたが三味線も立派な楽器である。中でも津軽三味線の奏法は独特で、弦をは「はじく」のではなく「引つ掛ける」ようにして弾く。と同時に本体の共鳴部をタップして「ミュート」し乾いた短打音を出す。フラメンコギターでもハコを叩く奏法があるがそれはあくまで打弦とは別個に行う「パーカッション奏法」である。クラシックの「ピチカート奏法」でもない。

最も近い物を探すといわゆるエレクトリックギター、ベースというスラップ奏法から派生した「チョップ」奏法がどうやらそれで、「この近代表法が確立する。」

八十年代初頭よりもっと昔に津軽三味線にあったとは驚くほかない。ばちの往復でちゃんと「チョップダウン&アップ」しているのも同じだ。弦を最終的にははじき、ボディに押し付けけない点が唯一異なる。一方、ネック上で開放弦長の整数分の一倍音点にピンタッチして金属的な鋭い倍音を出す、いわゆる「ハーモニクス奏法」も見られる。琴など他の奏者では見られないのではないだろうか。

弦の「ブーン」という原音に本体の「パチン」という打音、そして「キン」という倍音の三つの成分が同時に奏でられるのが聴こえる。その倍音成分が原音と和音を構成するのであの独特の音の輪郭になる。音階は基本的には四七抜き音階だが二ビートシャッフルが多い他の邦楽ではあまり多用されない三度和音、十六ビートが多く出てくるのは西洋的で斬新である。ネック上で押さえた弦を縦方向に揺らす。ホルタメント奏法と横方向にずらせる「チョーキング奏法」も巧みに用いて瞬時に一音一音効果的なゴブシを被せている。ここに歴代チャンプイオン小山内忠勝氏の燻し銀のテノールボイスが乗る。

「いんやー、まあんづまんづーう(笑)」

と聴こえる、ゆったりニツコリ軽妙な津軽弁で切り出すと一瞬にして聴衆の心を掴むトークは、その道の孤高のベテランなるゆえに気の毒なほど気さくな接客で、見事なステージパフォーマンスを堪能させてもらった。ロケ無しとは思えない、ナマ音だけでその豊かな表現力と音量に強く印象された、またとない一夜であった。

二十九日(水)

この日の予定は八甲田山、全ての予定ののち夜半には翌日の出勤に備えて自宅で床に就くという最も慌ただしい日でもある。

それに備えて準備する朝、嬉しいことに連泊した中でこのアートホテルの朝食バイキングが一番メニュー豊富で手が込んでいた。コケシの技術を用いたと思しき雑木の旋盤切削出し、ザイルに通したリングのタペストリーが印象深いダイニング。

先ず見たご飯はモチチリ艶やか、この宿だけはちゃんと新しいコメを用いてしかも一番上手に炊けている。バジルソース添えのズッキーニまである。なすびよりも軽くて美味しいのになすびは減ってこれは誰も取るうとしないので、お言葉に甘えて遠慮なくグルツとすくってゴツリ頂く。かじるとゴリもベチャもなくどれも満遍なく火が通されていた。相当な腕っ節のシェフ長が居ると観る。

コーヒーやコーラを選んでる場合ではない。ねふた村で値段を見ている以上当然ここは青森りんごジュース、指名一択で貰く。イカメンチも外せない。経費還元唯一の機会、いつものシウマイやソーセージなどのお子ちゃまメニューなんざ一切無視するのが賢明である。

さて、出発は八時過ぎ、山まで一時間、この日もロープウェイを使う。小型バス並みの大きなゴンドラで、初めて見るサイズだ。

上は曇りがちであるが、時折雲の晴れ間から薄日が差し、遠景も見え隠れする。そんな涼しい山頂の遊歩道をぐるっと廻る。山の名前だけは重苦しいイメージだが実際はそんなことはない。厳冬期は雪と氷に閉ざされるが、ハイシーズンには里山の表情と高原の雰囲気が織り混ざり、湿地帯まで広がり豊かな植生が楽しめる。

今回の三山の中で最もカラフルな山であることはこの山の名譽のためにも申し添えておきたい。

酸ヶ湯温泉に下りると登山道の終端は温泉駐車場に直結し、目の前に温泉施設がある。その傍らに靴を洗える水道が設備されており、これは大変ありがたかった。スッキリした靴をボストンバッグに収める。これで安心して飛行機に積める。

当初の予定では史料館に寄るのだが諸事情を勘案、夕食も視野にこのまま直接青森空港に向かう。

バスがスルスルと坂を登ると視界が開けて忽然と広い施設が現われる。この空港は小高い丘の上に切り開かれているとは知らなかった。

六時半発までは充分時間がある。となれば土産物店を中心に和洋食レストランが両端にある。ここでもざる蕎麦にする。飛行機は往路と同じ機種で伊丹に戻る。

九月間近の東北は日暮れが早い。上昇して水平飛行に移って暫くは雲が見えたが機長アナウンスが長野市街上空であることと乱気流を通ることが告げられる。なるほど縦に長い街灯りがそれなのだろう。見慣れた夜景が見えてきた。大阪の方が雲が多い。降着装置が床下でゴトンと動くと急にゴーゴーとうるさくなつて上半身が前に引つ張られる。この日は着陸する迄翼はバタついて落ち着かなかつた。

週のなか日なので相応の混雑も覚悟していたが、高速各路線に車が分散しているので深刻なまでには混んでいない。八時を廻ると次第に路線トラックの比率が増える。彼等は一定速度で走ってくれるのでむしろ走りやすく居心地が良い。

安濃サービスイリアで小休止、ここで沖崎氏から解散宣言がある。四台仕立は解かれそれぞれの帰着地へと脚を向けた。新宮へは日付けが変わる前に着いた。

途中、疲労でペースを乱すメンバーもあつたが、前述の通り大きな事故や障害もなく、全員無事に帰着できたことは何よりである。今回は遠く東北の山々を矢継ぎ早に通ってきたが、山彦旅行も年々洗練されていくはずである。来年もまたぜひ皆様と一緒させて頂きたいと思う。メンバーお一人お一人の温かいサポートに感謝申し上げます。

上村 拝